

もど子と人婦

第五卷第四號

駱駝追ひ

やまとの翁

亞弗利加といふ所は、大層熱い
所ですが、其處には沙漠といつ
て、何千里とも知れない沙原が
あります。この沙漠には、山も
川もなければ木も草もありませ

ず。勿論水などもありませぬ。たゞ、時々チヨンボリした草地が見付かることがあつて、そこには草もあり芭蕉もあり又泉もありです。従つて、亞弗利加の中でも、沙漠は、尙更熱いのです。ですから、こゝを旅する人は、とても一人では通れない。大勢隊を組んで駱駝に乗つて行くですが、夫を隊商といひます。

今お話をするのは、この沙漠であつた話です。亞弗利加に、ハッサンといふ商賣人がありました。いつも、駱駝を逐うてこの沙漠を旅して商賣に出懸けるのでありましたが。ある時ハッサンは商賣先から、家へ手紙をよこしました。其手書の意味はこうなのです。

「私は暫らく、この土地に留まつて居なければならぬから、この

次^{つぎ}こちらへ來^くる隊商^{たいしやう}と一所^{いちよ}に、アリーをよこしてくれ、したら、私^{わたし}は、アリーと一所^{いちよ}に歸^{かへ}るから一

アリーといふのは、ハッサンの一人^{ひとり}子^こです。此^{こゝ}手紙^{てがみ}を見て、アリーの母^かさんは、ひどく心配^{しんぱい}しました。まだ年^{とし}も行^いかない子供^{こども}を始めて、こんな遠^{とほ}い旅^{たび}へ出^だすのは、どうにも、危^{あぶな}い様に思^{おも}はれてなりませんのでした。しかし、又^{また}思^{おも}ひ返^{かへ}して、アリーは、子供^{こども}だといつても、も一、大分^{たいぶん}年^{とし}も行^いつてるから、お父^{ちち}さんの仕事^{しごと}の手^て助^{たすけ}もしなくてはならない。まさか、危^{あぶな}い事^{こと}もあるまいと思^{おも}って、いよく次^{つぎ}の隊商^{たいしやう}と一所^{いちよ}に旅^{たび}にやることに決^きめて、それく用意^{ようい}をして待^{まち}って居^まりました。

アリーは又^{また}久^{ひさ}しぶりで、お父^{ちち}さんに遇^あへると思^{おも}って、嬉^{うれ}しくて堪^た

りませんでした、夫で、チャンと駱駝に鞍を置いて、水の洩らな
 い様にと、水瓶も新らしいのを取り代へるやら、いろいろ急がし
 がって用意をして居ると、おっ母さんは又おっ母さんで、残る方
 なく、アリーの爲に旅の用意を整へました。

其中に、とうく旅立ちの日が來ました。大勢の隊商が駱駝に乗
 っつてやっつて參りました。夫でアリーも、日頃可愛がって居った駱
 駝を厩から引き出して來ました。アリーはも一前から之に乗って
 沙漠に出かけたくなって仕様がなかつたのでした。アリーがこの通
 り可愛がって居ますから、駱駝もアリーには日頃から、至ってな
 ついて居ます。もとは、お父さんが、さまざま苦心して儲けたお
 金で餘所から買つて來たのでありまして。只今では、この駱駝の

お蔭で、アリーの家は食べられて行ける位、大切なものになって居ます。

駱駄といふと、皆さん、動物園なぞで御覧になつたでせうが、あんなに大きな身體をして居ますが、夫でも、性質は大層柔しい獣なのです。で、アリーは自分所の駱駄を「綿毛」と名を付けて居ましたが、「綿毛」も極めて柔順で、アリーのいふ事なら、行ったり来たり、立ったり座はったり、何でも命令通りにします。

さて、いよく出發の日になりました、アリーはおっ母さんにお暇乞をして、皆とつれ立って、出かけました。一匹の駱駄は首の回ばりに鈴をつけて真先に立ちますと、其ガラン／＼といふ音を聞いて他の者は、夫について行きます。アリーは振り回って見ま

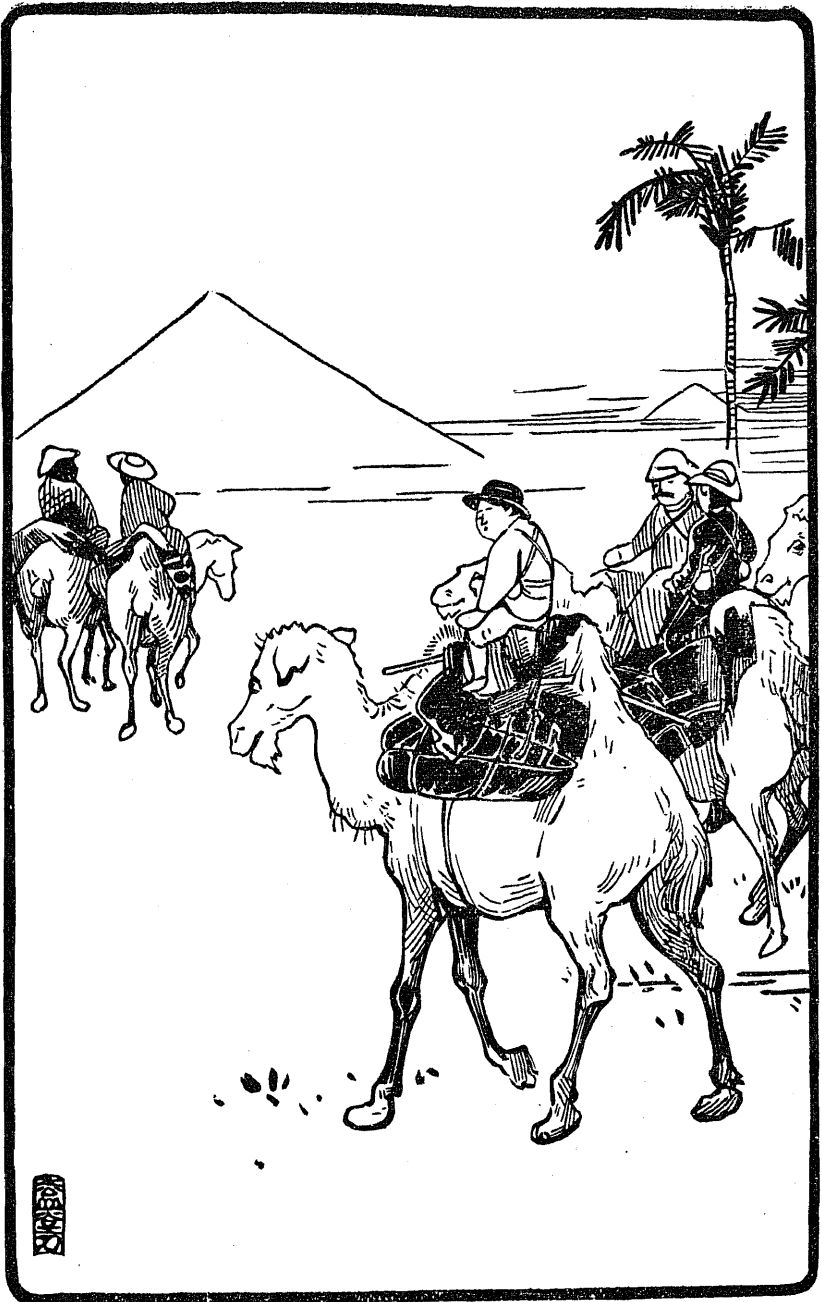
すと、おっ母さんは門の所に立ってじつと眺めて居らっしゃるの
 でいきなりハンケチを取って、帽子の上で振りますと、おっ母さ
 んも、頭に冠って居た手拭を取って高く振って居ます。

駱駄は、トットトットトットと歩いて行きます。駱駄追ひは、お互
 に笑ったり話したりして居ます。所で、大勢の中で、アリー一人
 が子供でありまして、話してくれる人もなければ、氣を付けてく
 れる人もありません。然し、アリーは中々きかぬ氣の子ですから
 そんなことには、一向頓着しませんでした。たゞ話し相手といふ
 のは、自分の乗って居る綿毛丈で、時々、其脊中を叩いては、
 ちきお父さんに御目にかゝれるのだといふことを話し聞かせて居
 ます。アリーの家を出た時は、朝早く涼しい時でしたが其中、日

が高^{たか}く上^あつて來^くるに從^{したが}つて、だんく暑^{あつ}くなつて來^きて、朝^{あさ}の涼^{すず}しい風^{かぜ}は丸^{まる}で吹^ふき已^やんで、お晝^{ひる}近^{ちか}くなつてからは、ひどく蒸^むせ熱^{あつ}くなつて來^きました。

砂^{すな}は火^ひの様^{よう}に輝^{かがや}く、見^みれるものとは、砂^{すな}と空^{そら}との外^{ほか}に何^{なに}もありません。其中^{そのうち}、一同^{いちどう}は少^{すく}し許^{ばい}りの草^{くさ}地^ちを見^み付^つけて、そこに休^{やす}憩^いをするこゝたになりました。然^{しか}し、各^{めい}自^じ持^もつて來^きた水^{すい}筒^{とう}は今^き日^{じつ}は手^てを付^つけませんでした。何^{なに}故^げかといふに、この所^{ところ}には小^{ちい}さな小^せ川^{がは}があつて、大^{おほ}勢^{せい}は其^{その}流^{なが}れてる水^{みづ}を飲^のんだからでした。尤^{もつと}も駱^{らく}駝^だで見^みると、幾^{いく}日^{にち}でも水^{みづ}を飲^のまずに居^ゐることが出^で來^きるのであります。

暫^{しば}らく休^{やす}憩^いした後^{あと}で、膝^{ひざ}まついて居^ゐた駱^{らく}駝^だは又^{また}立^たち上^あることを命^{めい}ぜられる、乘^{のり}手^ては其^{その}脊^せ中^{ちゆう}に上^ある、そして一^{ひと}組^{ぐみ}の隊^{たい}商^{しやう}は、此^{この}場^ば所^{しょ}を



後にして進みました。

さて、其中夜になりましたので、此一組は、又或場所に陣取って休息しました。駱駝も座る、周囲には盛んに火を焼く、そして食物などが整らへられる。

さて、こんな風にして何日もやって行きました、アリーは、何だか、こんな事が大變面白い様に思つて、行くくは是非、こんな商賣をやつて行かうと考へたことでした。

こゝで、一つ申して置くことがあります。夫はこの沙漠旅行中の危険のことで、其一つは、荒っぽいアラビア人の盜賊に出遭ふといふ恐れですが、この度の旅行に於ては、幸ひ、之に出くわすといふこともありませんでした、所が、不幸にして、この「アラビア」

人よりも、もっと恐るべき沙漠の危険が起つて來ました。

夫は、沙漠中の暴風でした。此暴風は非常に恐ろしいもので、燒

き付ける様な熱風が、砂を捲き上げてやつて來た時は、夫こそ、

天も地も丸で、夜の様な眞闇になつて、鼻孔から眼から耳から

一面に砂を吹きこまれるから、とても顔を上げる譯には行かない、

この際はもう、皆が駱駝から下りて、地面にうつ伏せになつて仕

舞より他に仕方がないのであります。で、此暴風の爲めに、不幸

なる隊商等が一同砂の中に生き埋めになつて仕舞ふことなどが間

々あるといふことです。

所が、アリーの一組は、此暴風には出遭つたが幸に無事に濟むで

しまつたので、さあ出かけ様としました所が、困つた事には、今

の大風の爲めに、砂漠中の踐み慣らされた道が、跡形もなくな
て仕舞ったのであります、道案内の駱駝追ひも、之では、どう行
つてよいか、さっぱり分らぬといつて、動かない。ずーっと眺て
見ても、一向、草地の様な所もあり相になし。どこが、西やら東
やら方角も分りませぬ。仕方がないから、皆は、或時は右へ行つ
て見たり、又或時は左へ行つて見たりして、たゞうろくして居
る許りでした。

そこで、皆がも一度より合つて、相談をした末、今度は、思ひ切
つて、日の入る方へ進んで見よう、ひよつとしたら、いゝ道を見
付けることが、出来ようも知れぬといふ事であった。所が、そう
こうしてゐる中に、全く夜になつた。夫でも道が分らない、其上、

各自の水筒がすっかり空虚になつて仕舞つてるのだが、夫に水を入
 入れる場所も見付からない。一度か二度、誰かが、遠方で木の様
 なものが見えたといったが、然し、夫は、地平線に見えた雲の
 小さな塊りであつたのでした。さあ、こうなると、皆はもう落膽
 して仕舞つて、おまけに、風に出遭つてから、一滴の水も嘗めな
 いから、無闇と、喉が渴いて仕方がなくなりました(つゞく)

スプリング
Spring.....春

エプリル
April.....四月

フラワー
Flower.....花

バード
Bird.....鳥

キャメル
Camel.....らくだ